

平成30年 6月28日現在

機関番号：32678

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770109

研究課題名(和文) フラナリー・オコナー作品における身体と冷戦期アメリカン・コミック

研究課題名(英文) American Comical Body in Flannery O'Connor

研究代表者

杉本 裕代 (Sugimoto, Hiroyo)

東京都市大学・共通教育部・講師

研究者番号：20581797

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本課題を展開していくうえで、冷戦期文化としての創作学科と文学という研究の高まりと出会い、オコナー作品にある皮肉めいたコミカルさが、当時の新批評の思想に沿った創作作法をオコナーなりのやり方で最大限に高めたものであることを確認できた。そうした研究動向をふまえながら、本研究課題の独自の視点として、第3派フェミニズムの視点から、オコナーの語りを分析し、知的な伝統やモダニズム的語りのなかで描出される女性の身体に欠損を描くことで、オコナーのフェミニズム的問題提起のふるまいを確認した。

研究成果の概要(英文)：This project aims to analysis the depictions of female body in Flannery O'Connor's works and discuss the representations of female bodies in contemporary context, especially in American comic Wonder Woman. While Kurt Vonnegut said O'Connor was the best writer in the twenty century, literary interpretation and criticism of O'Connor were limited into religious or Gothic tradition. However the discussions of historical and cultural framework of Cold War have changed the trend. In my discussion, I introduced, discussed and reinterpreted Mark McGurl's challenging interpretations and discuss an "fundamental" contradictions of her works.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：サードウェーブ ワンダー・ウーマン アメリカン・コミック フラナリー・オコナー 女性と身体
クリエイティブ・ライティング

1. 研究開始当初の背景

本研究「フラナリー・オコナー作品における身体と冷戦期アメリカン・コミック」は、(1)1950年代に活躍したオコナーと、南部知識人の思想的状況との影響関係を明らかにし、(2)初期アメリカン・コミック世界で神話化された女性の身体表象と、オコナー作品の女性身体と比較を行い、(3)オコナー作品が、冷戦期の政治的状況とアメリカの思想の緊迫した状況のなかで、身体表象を通じていかなる批評を加えていたか、を明らかにする。信仰小説やゴシック小説として脱歴史化されることが多かったオコナー作品で、とりわけ、グロテスクさの象徴とされる義足の女性や動物化する少年の身体が、単なる虚無主義や絶望による描写ではなく、当時のリベラリズムの中で隠蔽される「生(life)」に対する可能性を示していたことを、同時代的文脈の中で明らかにしたい。

宗教小説としてのオコナー批評が長らく続いていた状況に、2つの論考が決定的な変化をもたらした。1つ目に、Jon Lance Baconによる、2005年のFlannery O'Connor and Cold War Cultureがある。冷戦期の大衆文化(SF映画、アメリカン・コミック、ホラー小説)の中にある、冷戦期的詩学(暗黒イメージの強調、平和な空間に外部からの侵入者が突然現れる、といった他者表象とパニック)を挙げ、オコナー作品にも、同じ構図があることを指摘した。オコナー作品に同時代的な政治性を読み込むことを可能にした点で、Baconの功績は大きい。しかし、その構図を指摘するにとどまり、オコナー作品が、なぜ、ここまでアイロニーに満ちてるのかは説明していない。

また、2009年は、David H. Evansにより、精神医学のアプローチから、画期的なオコナーの身体表象論が登場した。“CUT! ... Flannery O'Connor's Apotemnophilia Allegories”における、「Apotemnophilia」とは、自らの四肢を切断することを望む精神状態、自らを四肢切断患者として妄想することで性的興奮を得る精神疾患を意味する。この論考は、“What is a man?”という問いかけが、オコナー作品の根底にあると論じる点で、本研究と着想の共通点がある。しかしながら、Evansは、“What is a man?”を障害者/健常者という二項対立を切り崩す方向へ論じ、オコナーと倫理という議論へと進む。その際に、その倫理を支えていた時代状況や価値観についての議論が欠落したまま、「完全/不完全」(Completion)を作家としてどう描いたかという脱歴史の議論に終始してしまう。

2. 研究の目的

フラナリー・オコナーは、作品発表当時から「短編の名手」と賞賛され、カート・ヴォネ

ガットをして、「自分たちの世代で最も偉大な短編作家は、フラナリー・オコナーだ」と言わしめた。義足の高学歴独身女性、サルの着ぐるみと一体化する少年や、胴体に鉄条網をまきつける狂信者といった強烈なキャラクターが登場し、彼女自身の伝記的事実(遺伝性の難病で早逝した、カトリック信者であった)と相まって、オコナー作品はアイロニーゆえに論じにくいとされる一方で、その魅力を語るためには、「普遍性」というのがキーワードとなり、抽象化された議論に作品の可能性を託すことが長らく続いていた。そして、彼女の物語に特徴的である、冷笑というにはあまりに絶望的な人物描写や物語展開は、信仰ゆえの現実社会や彼女の厳しい運命への絶望や抵抗の反映だとされてきた。本研究は、このように脱歴史化されがちなオコナー作品を、冷戦期文化のなかに位置付けること、そして、オコナー自身がコミック作家志望であった伝記的事実をヒントとしながら、(1)オコナー作品がもっていた女性表象の可能性を指摘し、(2)メディア論とオコナーの作品研究に新しいアプローチで貢献することを目的としている。

3. 研究の方法

「女性」であるということが、1950年代当時、作家という主体を構築するにあたって、どのような矛盾を生じせしめるものであったかを、資料調査と、理論的枠組みの整理(1950年代と現代)を行いながら検討する。

(1) 理論的側面

(1950年代) 1950年代の文化や思想、「知識人」をキーワードにして資料収集・理論化。

(2) 資料収集

1. オコナーとメディアというテーマで、一次資料の調査。

2. アメリカン・コミックの女性アイコン「ワンダー・ウーマン」

(3) 補足的理論

(現代) コミック研究、メディア研究、第3派フェミニズム(現代)

これらの理論的軸に加えて、冷戦期文化の文脈や、クリエイティブ・ライティングの教育制度や文化的背景を補足していくことで、オコナー作品のなかにある矛盾と洗練を整理していく作業を行った。

4. 研究成果

冷戦期の文学思想・文化思想のなかに、女性の身体が表象される余地は全くなかったように思えるが、実は、完全に不可視化されたのではない。むしろ、極度に神話化され、ある意味で男性化されたアイコンがある。1941

年にアメリカン・コミックに登場して以降、テレビ番組でも大人気を博した「ワンダー・ウーマン」である。男性ヒーローと重なる「完璧な身体」は、「完璧なプロポーション」の、バスト豊かでウェストの引き締まったセクシーな身体で、強敵を打ちのめす強靭さも兼ね備えた存在だ。本研究では、この「ワンダー・ウーマン」が、1960年代～1980年代にフェミニズムのアイコンとして賞賛された現象に注目しながら、オコナーの描こうとした義足の女性が、ワンダー・ウーマンとの対比でどう読めるのかを検証する。

1950年代は、実は「大衆」と「知識人」が明確に対比されはじめた時期である。この両者の言説を並置した議論でこそ、「父でもなく、母でもなく、妻でもない」女性作家が、「完璧な身体」以外を描いた意味を明らかにできた。

本研究が目指すのは、オコナー批評に頻出するキーワード、「良識」とか「常識」「モラル」と呼ばれる思考自体を、普遍的な所与のものとして考えるのではなく、冷戦期が生んだ新しい思考方法だったと歴史化することから始まる。

このアプローチの基盤となり、決定的な影響を受けた論考は、越智博美著『モダニズムの南部的瞬間』(研究社、2012年)である。この論考は、南部知識人たちが、「敗北」というイメージを思想的伝統として戦略的に利用することで、同時代の共産主義とアメリカ政治との緊張関係から身をかかわしたプロセスを文学思想史の観点から明らかにし、そこに特定の身体表象＝白人の完全で神話化された身体イメージがある種の高揚と共に生じる、というポリティクスを説き起こした。この難解な作業によって切り拓かれた道筋のうえに、本研究があると言える。

つまり、越智の仕事により、申請者が気づいた論点とは、モダニズムなり、ニュークリティシズム、モラリズムといった冷戦期のアメリカ文学人たちの思想のなかで、女性の身体は登場の余地はあったのだろうか？、という視点である。そして、オコナー作品の女性たちのグロテスクな身体は、単なる悲観主義ではなく、極度に神話化された男性中心主義の詩学のなかで、それでも、女性が、知的でモラリストであろうとした際に生じる大きな軋轢や矛盾を露わにしているのではないかと思うに至った。

□研究が順調に進んでいくと、本研究が導くオコナーの再評価は、ジェンダーや階級、知識人の役割などに関する、現代的な再解釈をともなった作業が必要となってくる。この研究期間終了後、その後の発展形として見えてくるのは、1950年代に産声を上げたフェミニズムの再考作業である。「古典」となったBetty FredanのFeminine Mystique(1951)や、1980年代に活動の最盛期を迎えたラディカルフェミニストのGloria Steinemなど、もはや有効ではないように見える「かつての」

フェミニズムについて、それらを切り捨てるのではなく、現代での意義を再検討する作業になるだろう。理論的に説明を行っていくために、第3派フェミニズム(Third Wave Feminism)の論考を参考にする必要があると考える。

こうした議論を展開していくなかで、映画『ワンダー・ウーマン』が実写映画としてリリースされたり、国連公式大使として任命されたものの、抗議がおきて、撤回されるなど、本研究課題の予想と一致するような出来事がおき、学术界のみならず、広く一般と議論を交わす機会をえることができた。

また、クリエイティブ・ライティングを教育制度として、その成立を歴史化し、ポリティクスと詩学を読み解こうとしたMark McGurlの論考と出会えたことにより、オコナーが、アメリカ南部詩人の伝統のなかで、男性的な知への尊敬と冷静な観察眼によって、結果的に抱え込んでいた矛盾が、彼女の作品の身体の表象に結びついていることを論じ、従来、オコナーがフェミニズムとは相いれない作家像だったところに、フェミニズムと呼びうる場面を描いていたことを提案することができた。

5. 主な発表論文等

{学会発表}(計 3件)

1. 杉本裕代「母と娘の物語 フラナリー・オコナーの語り」オベロン会 月例会
2017年

2. 杉本裕代「身体と物語ること--Flannery O'Connor 作品から Wonder Woman の女性身体表象を考える」日本アメリカ文学会 東京支部.2018年

3. Hiroyo Sugimoto. "Female Body and Writing Style: Flannery O'Connor's work and Cold War Context" The 2018 7th International Conference on Social Science and Humanity 2018.

{その他}

上映会およびディスカッション
ドキュメンタリー映画「Wonder Women! The Untold Story Of Superheroines」
2017年6月 Cultural Typhoon
コメンテーター：大塩真夕美(白百合女子大学・助教)

書評「呼びかわし、抱き合うフェミニズム
書評『終わらないフェミニズム』」New Perspective 2017年 新英米文学会

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉本 裕代 (SUGIMOTO, Hiroyo)
東京都市大学・共通教育部・講師
研究者番号：20581797

(2) 研究協力者

大塩 真夕美 (OHSHIO, Mayumi)
白百合女子大学・文学部・助教
研究者番号： 50781879

山口 菜穂子 (YAMAGUCHI, Nahoko)
フェミニズム研究家

松浦 恵美 (MATSUURA, Megumi)
立教大学非常勤講師